

特集・89・職員の自主研究⑥

都市活性化の核となる文化施策

音楽—その魅力を
生かした行政

長谷川秀 篠原一義 青木直人 金田竜生 松岡文和 犬塚 克 小室敏勝

一—はじめに

余暇時間の増加や、物質面の充実、また高齢化が進む中での生きがいの追及などによる人々の文化的なものへの志向の高まりは、今や一つの時代の流れとなりつつある。都市活性化を図るうえでも、従来のように経済面中心の考えだけではなく、こうした精神的充足を考慮しなければならぬ時代が到来したと言ってもいいだろう。

また、近年の横浜の文化を考えたとき、それが東京のそれから自立しているかについては、疑問の声があるのは否めない。事実、首都圏全体において通勤通学の吸引力や商業拠点の機能

でも、オリジナル横浜のセンター性は相対的に喪失しつつある。実際ここまで巨大化した東京に、あらゆる面に対抗するのは不可能であるし、横浜のミニ東京化もオリジナル横浜の喪失を助長するものとなるだろう。となると横浜が文化都市として自立していく最良の方法は、横浜らしさを引き出し都市を活性化する可能性のあるものがある程度絞り込み、それを内外に向けてアピールすることではないだろうか。本論ではその可能性のあるものの一つとして音楽を取り上げてみた。

二—横浜と音楽

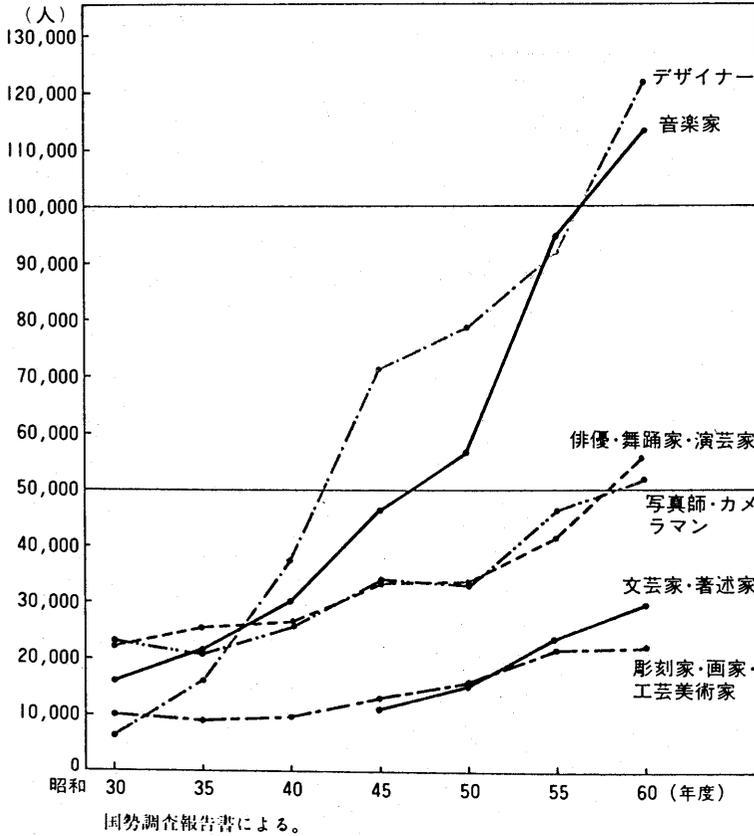
- 一—はじめに
- 二—横浜と音楽
- 三—国際音楽都市に向けての提言
- 四—おわりに

一口に都市活性化といってもその意味する範囲は広い。マクロ的には横浜市全体が横浜の魅力を発揮し都市として自立していくことであるし、ミクロ的には市民一人ひとりが高い市民意識を持って地域社会を形成していくことである。

本論は、このように広い意味を持った都市活性化を図るための文化施策の中から音楽に焦点を当て、その魅力を生かした幾つかの施策を提言するものである。

ただし都市活性化を図る文化施策の前提として「行政の文化化」の問題を避けては通れないことも触れておきたい。

図 分野別芸術家人口の推移



さて横浜の文化を考えると、横浜と音楽とは決して無縁なものではないことが分かる。安政六年の開港を機に、東日本で初めて西洋の音楽が息づく地となったのは横浜である。当時、外国人居留地の中で音楽を含む文化生活がいとなまれたことは、その後のわが国における西洋音楽の組織的な教育と展開のために、少なから

ぬ影響を与えたと思われる。ここで注目すべきことは、横浜の音楽は東京のそれとは異なり、常に日常の生活を楽しむためのものであったということである。居留地外国人にとっての明治大正にわたる半世紀のゲーテ座や、横浜市民にとっての大正時代に入ってから開港記念会館は、まさにこの音楽を楽しむ文化とのふ

れあいの場であったのである。このような歴史的背景からも、現在活躍している市民サイドの音楽団体の存在は無視できない。わが国一の歴史を誇るアマチュア・オーケストラ「横浜」(横浜交響

楽団)や、各地に広がる伝統ある合唱団がそれである。また、クラシック以外でも、戦後の本牧ベース時代のバンド音楽等は、横浜独自の文化といってもよく、見過ごすわけにはいかない。さて、このような背景とは別に、音楽とはそもそも世界の共通語であり、人々の心に国境や年齢を越えて共感を与えるものであるだけに、「国際化」や「高齢化」が叫ばれている昨今、魅力ある都市づくりに音楽を取り上げるのは不自然なことではない。また、図はわが国の分野別芸術家人口の推移を示したものであるが、近年の音楽家の急激な増加具合を見ても、時代がそれだけ音楽を必要としていることが分かる。以上のようなことから「横浜を国際音楽都市に」という新たなテーマを設定し幾つかの提言を行った。

三——国際音楽都市に向けての提言

① 特色ある音楽空間の創造

昭和六十一年十月に東京六本木のアークヒルズにできたサントリーホールが、音楽ファンに与えたインパクトは大きい。世界一響きの美しいホールを目指した当ホールは、音響設備をはじめ最高の設備を備えている。また「聴衆と演奏家が一体となって音楽をつくれるホールを

との意見が取り入れられ、客席の配置や素材にもさまざまな配慮がなされており、ゆったりと音楽を聴くには最適の空間となっている。

またこのホールのもう一つの特徴はその開発方法である。これはコンベンション・シティ・スタイルとよばれるもので、サントリーホールを軸にホテル、オフィスビル、ショッピングセンターやレストランなどを合体、つまり、業務地域と衣食住空間に、街の潤いやシンボルともいべき文化エリアを合わせて、一気に市街地の核を作ってしまうとするものである。当ホールが連日の賑わいを見せている背景には、このような特色ある開発方法があることを見逃すわけにはいかない。

豊かさの時代を反映して、人々の時間のつかいかたや行動様式も変化しており、それは音楽においても同じで、人々が演奏内容だけでなく、ホールを選択したり演奏会後の余韻を楽しむ時代になっている。『東洋一』といわれた県立音楽堂が完成してから三十四年、横浜に、もう一度『東洋一』を復活させてもよいであろう。そういう意味ではサントリーホールは、今後の魅力ある街づくりへのヒントになると思われる。

② 国際音楽祭の定期的開催

横浜の持つ魅力の一つに『異国情緒豊か』と

いうことを挙げることができよう。これは本市の歴史的背景からも説明できるが、実際に横浜は現在八つの都市と姉妹・友好都市を提携しており、これは全国でも最も多い部類に属している。このことは横浜の国際都市への可能性を示しているとも言える。しかしこれらの姉妹・友好都市が、市民にとって馴染みの薄いものになっているということも事実である。そこで真の国際化を目指すため、これらの姉妹・友好都市を中心とした国際音楽祭の開催を提案したい。ここで言う音楽祭とは単なる人集めのためのものではなく、『異国情緒豊か』という横浜の魅力を生かした市民本位のものであり、具体的には次の三つの場を持つものである。

①世界的に一流の奏者を招待したりコンクールなどを催し、音楽の持つ芸術性を高める場にする。

②音楽を通して他の国の文化を理解し、市民が国際活動に関心をもつような場にする。

③ふだん地域で活動を行っているグループが一堂に会し、活動の成果を発表する場にする。

このようにこの音楽祭の開催は、大きな効果を生む可能性があるが、これを真に実りあるものにするには、年度ごとにある特定の都市(国)の音楽を紹介していくといったような、継続的な開催が必要である。また現在民間レベルで行

われている各種音楽イベントを行政側がとりまとめ、全体の方向づけをすることも考えねばならないだろう。

③ 区役所を、音を通じた心の交流の場に

昭和六十三年一月に完成した鶴見区総合庁舎は、一階に区民の交流、文化活動等の場として区民ホールを設置した。これは区役所を単なる日常的業務処理の場としてだけでなく、積極的に区民に開かれた施設にしようとする一つの試みである。そして実際にこの区民ホールを使って、職員による昼のピアノコンサートや、各種展示会が開かれている。また、本庁舎では二十年以上にわたって市民広間を使った定期的な演奏会が催されているが、これは自治体としては大変ユニークなものであり、少なからぬ人の支持を得ているようである。

これらのホール演奏に共通しているのは、奏者が本市の職員やオーディション等の審査に合格した人であり、一般市民がステージに立つという機会はほとんどないということ、また演奏する場所が必ずしも音響的にはよい環境でないということである。たしかに市民が気軽に音楽に触れることができるという点では、ある程度のメリットはあるのだが、今一つ中途半端な施策のような気がする。

そこで区役所のホールの使用方法としては、区民がもっと気軽に参加できるような制度にすることを提言したい。

例えば、その地域のお年寄りの演奏会や幼稚園の発表会等を行ったり、プロの演奏家をよぶときは、演奏の合間に市民との交流（曲や楽器などの説明、音楽にまつわる世間話など）の機会を設けるのである。これに似た活動は現在地区センター等でも行われているが、区民が目的意識を持たなくても音楽に接することができるといふ点では、区役所のホールの方がより効果的であろう。また殺風景になりがちな役所のフロアには、心をなごませるようなBGMを流したり、区ごとに区のイメージソングをつくったりするのも面白いと思う。また市内のアマチュア・オーケストラの数は昭和四十年代まではわずかに二つであったのが、現在では七つに増え、これは区や地域ごとの団体が増えてきたからである。このような団体が活躍できる場としても区役所は、新たな可能性を持った空間であると言えよう。

このように区民が気軽に音楽に触れられるような環境を設ければ、それだけ音楽に対する関心も高まるであろうし、それを通じて地域意識が高まるということも十分考えられるのである。

④ 横浜独自の音楽育成システムを

真の意味での国際音楽都市になるには、一般市民が音楽に関心を示し、市民レベルの音楽活動が活発に行われるようになることである。そのために行政はある程度の育成システムを提供する必要があるだろう。ここではそれを義務教育、音楽家養成、普及活動の三つの分野に分け、提案を行いたい。

⑦ 義務教育

従来の画一的な教育でなく、柔軟性のある個人の興味、関心を重視する教育を行う。例えば横浜は他都市に比べ市内に在住する音楽家が多いが、この利点を生かして学校の音楽の時間に彼らを招待し、生の音楽を聴かせながら一緒に遊んだり、子供達が楽器に触れる機会を設けたりするのである。

⑧ 音楽家養成

地元横浜から世界的アーティストを生み出し、横浜独自の文化を形成するためにも、専門的教育を受けやすい環境にしたい。そのためには音大等専門教育機関を誘致し、海外への留学制度などを実施する。そして将来的には、一流アーティストが常に横浜に滞在するような環境にする。

⑨ 普及活動

今まで音楽に馴染みのなかった人にも、音楽の楽しさを発見してもらえよう普及活動

行う。例えば「一日音楽体験」といったものを行う。区ごとに行い、簡単なアンサンブルや音楽を使ったゲームを行うのである。このことは老後の生きがい対策などにも生かすことができ、高齢化対策の一環にもなると思われる。

これらの育成システムは、短期間で形成されるものではなく幾多の問題点も予想されるが、肝要なことは決して強制的なものにはならないよう、先にも述べた音楽を日常生活を楽しむためのものとしてとらえる、横浜独自の音楽に対する伝統的考えに合ったものにすべきである。

四——おわりに

以上、幾つかの具体的な提案を行ったが、最後に、都市の活性化ということ、今少し大きな視点で考察することにより、残された課題を展望してみたい。

思うに、人は誰でも、より生き生きと人間らしく生きたいという願望を心に秘めているにちがいない。都市の活性化は、この漠然と心に秘められた願望が具体的なイメージを与えられて希望と化し、市民一人ひとりの心身が活発に働き始めることだとは言えないだろうか。そうだとすると、都市を活性化するのは、具体的な市民のニーズに行政が答えるというようなこと

はなく、市民と市民、また市民と行政の相互の交流と自主的創造的な諸活動のダイナミズムを生み出し、その中から市民の「希望」を、少しずつ具体的なイメージに結晶化してゆくことに他ならない。しかし現状の、与えられた目的を効率よくこなすための縦割りの固い行政組織のままでは、このような創造的発展的な課題にとりくみ、都市活性化のダイナミズムを生み出すことは困難であろう。そうすると、行政自体の文化化という問題を避けては通れないことにな

る。しかしながらこの「行政の文化化」という課題自体が、いまだ漠然としかとらえられていないため、本研究においても各々の提案が十分なものになっていくということは否めない。今後はこれらの提案を更に具体化する過程で、この新しい課題についての研究も進めて行きたい。

△長谷川〓下水道局北部設計課、篠原〓市民局文化体育館、青木〓企画財政局調度課、金田〓総務局行政管理課、松岡〓同局教育課、犬塚〓

旭区総務課、小室〓瀬谷区建築課
参考文献

- 1 横浜市教育委員会：横浜の文化 No.12 より「横浜と音楽」
- 2 月刊アクロス：「東京の侵略」
- 3 文化庁：「我が国の文化と文化行政」
- 4 横浜市教育委員会：「文化団体名簿1987年版」
- 5 企画財政局都市科学研究室：調査季報86より「曲がり角にきた本牧ジャズ祭」